

平成21年度 成果と課題

1 「切実な問題」について

成果としては、指導者がねらいをはっきり持ったうえで子どもの切実な問題を見とろうとする意識が持てたことがあげられる。教師の思い、単元のねらい、子どもの思いの3つを常に考えて日々の授業を行うことを共通理解したうえで、子どもにとって切実な問題となっているかどうか、よい授業のバロメーターであることを認識できた。

一方、授業研究では、教師と子どもの思考のずれがあったり教師の支援が適切でなかったりしたことから、見とりの難しさが課題となった。ただし、その後の適切な修正方法について、協議で話し合われたことはよかった。また、指導者によって「子どもにとって切実であったかどうか」の捉えが異なり、その点については協議で議論してきた。見とりについては、今後さらに研究していく必要がある。

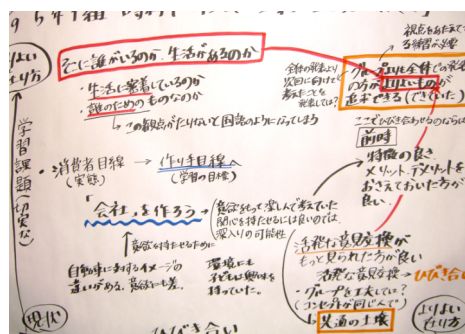
2 「単元をつくる」ことについて

子どもとともに授業をつくるということは、昨年度から行ってきたので、ずいぶん共通理解が進んだように思う。これを意識しながら授業をすると、授業後の子どもたちにも満足感が見られるようになった。

全ての学習で「単元をつくる」ことは不可能なので、今後は、年度始めに各学級で重点として取り組む単元をある程度絞っておくことで、集中して単元づくりに臨めるのではないだろうか。

3 研究会の持ち方について

全体会でも、少人数のグループになり協議を行った。協議の視点は、基本的にいつも同じなので、グループ協議後の報告会でも、参加者が共通の認識を持つことができた。模造紙にまとめていくことに難しさもあったが、参加者の思考を整理して記録することは、授業での板書と同じことなので、今後も続けていきたい。



4 子どもの変容について

この2年間の研究により、自分たちが授業を進めていくという意識を低学年段階から持てるようになってきた。高学年は、友だちと関わり合いながら学ぶという、学校ならではの学びの喜びを実感できている。研究の方向性を継続した成果が現れたように思う。

5 おわりに

2年目ということで、教師間の共通理解も深まってきた。また、昨年よりも子どもたちの変容を見ることができたように思う。今後も継続することで、より主体的な子どもが育っていくことが考えられる。